自己スキーマと出身地についての知識との関連
—沖縄県を例にして—

宮城　円・山入端津由・中尾　敬・宮谷真人

Relation between self-schema and knowledge of the hometown:
A case of Okinawa

Madoka Miyagi, Tsuyoshi Yamanoha, Takashi Nakao, and Makoto Miyatani

本研究は，沖縄県大学生を対象に，自己スキーマと特定の文化に最も多くみられる性格特性（モーダル・パーソナリティ）の関連について川平（1988）の性格特性認知課題を用いて検討した。性格特性認知課題では，予備調査を基に選定した沖縄県民と他県民のモーダル・パーソナリティが自己の性格にあてはまるか（自己判断課題），沖縄県民と他県民のどちらに特徴的か（モーダル・パーソナリティ判断課題）の判断を課した。また，モーダル・パーソナリティ判断課題の前には，自己の性格が日本人的か否かのフィードバックあるいは沖縄の自然風景写真を提示することによって，沖縄県民意識の操作を行った。実験の結果，自己判断課題において，自己記述的と判断された沖縄県民と他県民のモーダル・パーソナリティ数に出身県による差はみられなかった。しかし，沖縄の自然風景写真を提示後にモーダル・パーソナリティ判断課題を課した場合，沖縄県出身者は沖縄県民のモーダル・パーソナリティを正確に識別できることが明らかになった。以上の結果は，現在の沖縄県民においては自己スキーマとモーダル・パーソナリティの関連が希薄化していることを示唆している。

キーワード：自己スキーマ，モーダル・パーソナリティ，沖縄県

問　題

われわれの日常生活は無数の情報であふれている。しかし，そのすべてを処理することは不可能である。そのため，あらゆる情報の中から自分自身に関連のある情報を集め，選択的な処理を行っている。このときの自己関連情報の処理には，他の情報処理にみられない性質があることが知られている。たとえば，同じ情報であっても，それを前もって自己に関連づける認知操作を行うと記憶成績が向上する（Rogers, Kuipper & Kirker, 1977）。また，自己に適合した情報は，より速く正確に処理され，逆に不適合な情報に対しては反応時間が遅れ，その情報の真偽を疑うといった抵抗が生じる（Markus, 1977）。

このような自己関連情報の処理にみられる性質は，自己スキーマ (self-schema) によってもたらされていると考えられる。自己スキーマとは，過去経験や外部環境に関する知識構造であるスキーマ (schema) が自己という領域に形成されたものであり，自己関連情報の処理を体制化し，導くように機能する (Markus, 1977)。スキーマと同様に，自己スキーマも個人の過去経験から形成され，一度その構造が確立すると，その保持に有利なように情報処理の各段階において選択的な作用を及ぼす。Markus (1977) は，自己を複数の自己スキーマのシステムとして概念化し，自己スキーマの存在が自己の安定性を維持するように機能していると考えた。

このような性質を持つ自己スキーマは，文化で共有された自己観を基盤にして形成されると考えられている (Markus & Kitayama, 1991)。実際，自己スキーマには，国民性や県民性といった特定の文化や社会に最も多くみられる性格特性 (モーダル・パーソナリティ: Du Bois, 1944) が含まれていることが沖縄県民を対象とした研究から示されている (川平，1988)。沖縄県民は全国で最も県民意識が強く (NHK 放送研究所，1997; 大城，1972)，沖縄県民の県民意識の強さには，沖縄県の亜熱帯性の気候に島嶼性や辺境性といった地理的特性，そして複雑な歴史体験により形成された独自の文化が影響しているとされる (東江，1991; 東江，2006)。東江 (1991) は，文化によってもたらされる独自性意識が，沖縄県民である自身と他県民を対照的な存在だとする見方を生じさせ，沖縄県民の自己認知に影響を及ぼしていることを指摘している。そこで川平 (1988) は，沖縄県民の自己スキーマとモーダル・パーソナリティの関連について，沖縄県民と他県民のモーダル・パーソナリティが自己の性格に適合するか，また，それが沖縄県民と他県民のどちらに特徴的かの判断を課す性格特性認知課題を用いて検討した。実験の結果，沖縄県民は，他県民に比べ自己の性格と沖縄県民のモーダル・パーソナリティの一致度が高かった。このことから，沖縄県民の自己スキーマには，モーダル・パーソナリティが含まれていることが示された。また，自分が沖縄県民であることを意識させる教示を行った場合には，自分が沖縄県民であることを意識させない教示を行った場合よりも，沖縄県民のモーダル・パーソナリティについての判断が速く正確になった。このことは，沖縄県民の自己スキーマに含まれるモーダル・パーソナリティは構造化されており，沖縄に関連した情報の処理を体制化する沖縄スキーマとして機能していることを示している。

このように川平 (1988) は，沖縄県民の自己スキーマに沖縄スキーマが含まれることを示したが，日本という一つの国家の中に沖縄県が位置づけられて久しい今日において，沖縄県民が自身と他県民の特性の差異を意識する程度は弱くなっていると考えられる。そのため，現在も沖縄スキーマが沖縄県民の自己スキーマとして機能しているかどうかについては，改めて検討する必要がある。

そこで本研究は，沖縄県民の自己スキーマとモーダル・パーソナリティの関連性を検討する。より具体的には，自身と他県民の特性の差異を意識する程度が弱くなったと推測される現在の沖縄県民においても，川平 (1988) と同様，自己スキーマの中に沖縄スキーマが含まれているのかを検討する。なお，本研究は川平 (1988) の方法を踏まえて行ったが，次のような変更を加えた。一つは，性格特性語の種類の変更である。川平 (1988) は，60 の性格特性語が沖縄県民と他県民のそれぞれにあてはまる程度を調べることによって，両者のモーダル・パーソナリティを明らかにしている。だが，このとき用いられた性格特性語の中には，現在では性格を形容する語として用いられること

が少ないものがみられたため，本研究の対象者とは別の大学生が回答した自己概念の内容を調べるWAIテスト（Who am I Test: Kuhn & Mcpartland, 1954）の反応語から，頻出度の高い性格特性語を新たに加えた。もう一つは，現在の沖縄県民の自己スキーマの中に沖縄スキーマが含まれていない可能性があることから，川平（1988）の自分が沖縄県民であることを意識させる教示によって自己スキーマの中の沖縄スキーマの存在を検討する操作に加え，自己スキーマとは関連しない沖縄スキーマの存在を検討するために沖縄の自然風景写真を提示する視覚情報刺激条件を設けた。

もし，現在の沖縄県民においても自己スキーマの中に沖縄スキーマが存在しているのであれば，川平（1988）と同様，沖縄県民は他県民に比べ自己の性格と沖縄県民のモーダル・パーソナリティの一致度が高くなるだろう。さらに，自分が沖縄県民であることを意識させる教示を行った場合には，自分が沖縄県民であることを意識させない教示を行った場合よりも，沖縄県民のモーダル・パーソナリティについての判断が正確になると予測される。一方，自己スキーマの中に沖縄スキーマが存在せず，自己スキーマとは関連の薄いものとして沖縄スキーマが存在しているのであれば，川平（1988）と同様の結果は得られず，沖縄の自然風景写真を提示する視覚情報刺激条件での沖縄県民のモーダル・パーソナリティ判断のみが正確になるだろう。

予備調査

現在の沖縄県民と他県民のモーダル・パーソナリティを把握すること，および性格特性認知課題で用いる刺激を作成することを目的として，予備調査を実施した。

方　法

調査対象者　沖縄県A，B大学生146名（沖縄県出身者87名，他県出身者59名，平均年齢19.1歳，$SD = 1.92$），C大学生160名（女性82名，平均年齢19.7歳，$SD = 1.39$）に調査を実施した。

調査手続き　大学の講義時間を利用し，無記名式の質問紙を配布，実施した。性格特性に対する社会的望ましさの評定が，沖縄県民と他県民のモーダル・パーソナリティの評定に影響されることを防ぐため，A，B大学生にモーダル・パーソナリティ調査を，C大学生に性格特性の社会的望ましさに関する調査を実施した。

調査時期　2012年6月

調査内容　川平（1988）が用いた60の性格特性語に，沖縄県大学生と他県大学生が回答したWAIテストの反応語から選定した10の性格特性語を加えた70の性格特性語を用い，それらが沖縄県民と他県民それぞれの性格イメージにあてはまる程度を“多くの”，“いくらかの”，“ごくわずかの”の3件法で回答を求めた。同様に70の性格特性語の社会的望ましさについて“好ましい”，“どちらでもない”，“好ましくない”の3件法で回答を求めた。

結果と考察

70の性格特性語について“多くの”と答えたものに1点，“いくらかの”に0点，“ごくわずかの”に−1点，同様に“好ましい”と答えたものに1点，“どちらでもない”に0点，“好ましくない”

に－1 点を与え，その平均値を各性格特性語に対する調査対象者全体の肯定度の大小を表す指標とした。肯定度を基に沖縄県民と他県民のそれぞれにあてはまると評価された性格特性語を順位づけし，Table 1 に示した。Table 1 のマス①⑤⑨は，沖縄県民と他県民の双方に同程度あてはまると評価された性格特性である。一方，マス②③⑥に含まれる性格特性語は，沖縄県民にはあてはまるが，他県民にはそれほどあてはまらないと評価された性格特性であり，特に③に含まれた性格特性語は，沖縄県民的で非他県民的と評価された特性である。逆に，マス④⑦⑧に含まれた性格特性語は，他県民的で非沖縄県民的と評価されたものである。沖縄県民と他県民の間に性格イメージの差がなければ，70 の性格特性語が両者にあてはまる程度はほぼ同一となり，対角線上のマス①⑤⑨に各性格特性語が布置するはずだが，Table 1 に示したよう性格特性語はそのようには布置せず，沖縄県民と他県民の性格イメージに差異があることが示唆された。

沖縄県民にあてはまると評価された上位 10 個の性格特性語である“マイペース”，“明るい”，“自由な”，“ひとがいい”，“のんき”，“おしゃべり”，“やさしい”，“人情に厚い”，“協力的”，“単純”を他県民にあてはめた場合，その平均順位は 48 位であった。逆に，他県民にあてはまると評価された上位 10 個の性格特性語である“注意深い”，“現実的”，“勤勉”，“敏感”，“礼儀正しい”，“神経質”，“心配性”，“負けず嫌い”，“用心深い”，“利己的”を沖縄県民にあてはめた場合の平均順位は 51 位であった。これらは，沖縄県民と他県民の性格イメージに隔たりがあることを示している。このように，沖縄県民と他県民の性格を異なるものとみなす傾向は，大城 (1972)，川平 (1988) でも同様に確認されている。

さらに注目すべき点は，沖縄県民と他県民それぞれにあてはまると判断された性格特性語には，社会的望ましさの高いものも低いものも含まれているということである (Table 2, Table 3)。これは，沖縄県民と他県民のモーダル・パーソナリティの評価に際して，沖縄県出身者および他県出身者の双方が，互いの性格を美化しているわけでも卑下しているわけでもないことを示している。

以上の結果を基に，性格特性認知課題で刺激として用いる沖縄県民と他県民のモーダル・パーソナリティを Table 2，3 のとおり選定した。

Table 1

性格特性の適合度

		他県民の性格特性		
		1—23 位	24—47 位	48—70 位
沖縄県民の性格特性	1—23 位	明るい 社交的 負けず嫌い ①	協力的 やさしい おしゃべり 幸福 恥ずかしがり 正直 率直 感情的 寂しがりや ②	マイペース のんき 自由な ひとがいい 人情に厚い 単純 甘え 興奮しやすい のろい ひょうきん ③
	24—47 位	外向的 頑固 辛抱強い 好き嫌いが激しい 思慮的 利己的 ④	道徳的 大胆 衝動的 従順 消極的 追従的 心配性 わがまま 短気 理想主義 人見知り ⑤	鈍感 冒険好き 粗野 軽率 はきはきしない 干渉的 小心 優柔不断 ⑥
	48—70 位	独立心 現実的 主体的 敏感 白か黒か二分 礼儀正しい 用心深い 生真面目 威圧的 神経質 勤勉 疑い深い 注意深い 政治的 ⑦	劣等感 閉鎖的 感情にむらがない ネガティブ ずるい 無口 ⑧	内気 非社交的 泣き虫 ⑨

Table 2

実験で用いる沖縄県民的性格特性語

性格特性語	沖縄県民（全体評価）		他県民（全体評価）		沖縄県民の自己評価		他県民の観察		社会的望ましさ
	肯定度	順位	肯定度	順位	肯定度	順位	肯定度	順位	
マイペース	0.82	1	−0.22	63	0.84	2	0.79	1	0.39
のんき	0.79	3	−0.52	69	0.81	3	0.76	3	0.18
ひとがいい	0.76	4	−0.02	46	0.78	4	0.72	5	0.56
自由な	0.74	5	−0.09	57	0.72	7	0.77	2	0.42
おしゃべり	0.71	6	0.15	29	0.71	9	0.72	5	0.37
人情に厚い	0.69	7	−0.04	50	0.72	7	0.62	7	0.73
やさしい	0.69	7	0.08	36	0.73	6	0.62	7	0.68
協力的	0.65	9	0.14	32	0.76	5	0.47	15	0.80
社交的	0.59	10	0.26	21	0.59	10	0.60	9	0.77
単純	0.55	11	−0.27	66	0.58	11	0.51	12	0.19
正直	0.53	12	0.05	38	0.55	12	0.49	13	0.64
幸福	0.48	13	0.08	36	0.48	13	0.49	13	0.74
ひょうきん	0.40	14	−0.08	54	0.38	16	0.42	18	0.22
興奮しやすい	0.40	14	−0.02	46	0.39	15	0.43	16	−0.24
率直	0.35	18	0.10	35	0.31	18	0.43	16	0.51
のろい	0.32	20	−0.62	70	0.40	14	0.19	22	0.65
感情的	0.31	21	0.00	42	0.33	17	0.30	21	−0.06
鈍感	0.25	22	−0.39	68	0.28	24	0.19	22	−0.22
はきはきしない	−0.12	43	−0.26	65	0.07	32	−0.43	55	−0.54
おおらか	—	—	—	—	—	—	—	—	—

Table 3

実験で用いる他県民的性格特性語

性格特性語	他県民（全体評価）		沖縄県民（全体評価）		他県民の自己評価		沖縄県民の観察		社会的望ましさ
	肯定度	順位	肯定度	順位	肯定度	順位	肯定度	順位	
注意深い	0.64	1	−0.63	70	0.56	1	0.71	3	0.62
現実的	0.62	2	−0.24	50	0.40	8	0.76	2	0.57
勤勉	0.59	3	−0.52	64	0.33	12	0.77	1	0.37
礼儀正しい	0.53	4	−0.12	43	0.47	3	0.58	5	0.74
敏感	0.53	4	−0.33	58	0.45	4	0.58	5	0.52
用心深い	0.49	7	−0.31	57	0.42	6	0.54	9	0.48
頑固	0.45	8	0.03	35	0.45	4	0.46	14	−0.04
神経質	0.45	8	−0.52	64	0.37	9	0.51	11	−0.06
独立心	0.41	10	−0.22	49	0.04	44	0.65	4	0.35
利己的	0.41	10	−0.19	48	0.34	11	0.47	13	0.08
好き嫌いが激しい	0.40	12	0.02	36	0.25	16	0.50	12	−0.27
主体的	0.37	13	−0.03	37	0.08	37	0.56	7	0.40
疑い深い	0.36	14	−0.54	66	0.26	15	0.41	17	−0.04
思慮的	0.33	16	−0.17	47	0.42	6	0.27	21	0.51
辛抱強い	0.29	18	0.07	30	0.23	18	0.32	18	0.68
心配性	0.29	18	−0.04	38	0.32	13	0.26	24	0.28
威圧的	0.25	22	−0.25	53	0.19	23	0.29	19	−0.42
従順	0.20	24	−0.11	42	0.23	18	0.19	25	0.26
人見知り	0.16	28	−0.09	40	0.25	16	0.10	30	−0.22
道徳的	0.15	29	0.17	28	0.19	23	0.12	29	0.51

実　験

本実験の目的は，現在の沖縄県民の自己スキーマとモーダル・パーソナリティの関連を検討することである。現在の沖縄県民においても自己スキーマの中に沖縄スキーマが存在するのであれば，川平 (1988) と同様，沖縄県民は他県民に比べ自己の性格と沖縄県民のモーダル・パーソナリティの一致度が高くなるだろう。加えて，沖縄県民意識を喚起させる教示を行った場合には，沖縄県民意識を喚起させない教示を行った場合よりも，沖縄県民のモーダル・パーソナリティについての判断が正確になるだろう。一方，沖縄スキーマが自己スキーマとは関連の薄いものとして存在しているのであれば，川平 (1988) と同様の結果は得られず，沖縄の自然風景写真を提示する視覚情報刺激条件での沖縄県民のモーダル・パーソナリティ判断のみが正確になると予測される。

方　法

実験参加者　沖縄県内の大学に通う沖縄県出身者 27 名 (女性 23 名)，他県出身者 10 名 (女性 8 名) の 37 名が実験に参加した。沖縄県出身者の平均年齢は 20.7 歳 (SD = 1.41)，他県出身者の平均年齢は 21.8 歳 (SD = 0.89) であった。

実験計画　独立変数は，出身県 (沖縄県・他県) と自己認知操作 (沖縄県民意識喚起あり・沖縄県民意識喚起なし) の 2 つで，すべて実験参加者間変数とした。自己認知操作は，川平 (1988) と同様の方法を用いた。また，非言語情報による沖縄県民意識の喚起が期待される視覚情報刺激条件を自己認知操作条件とは別に設けた。

刺激と装置　予備調査の結果を基に選定した沖縄県民的性格特性語 20 個 (Table 2) と他県民的性格特性語 20 個 (Table 3) の 40 個の性格特性語を刺激として用いた。また，視覚情報刺激として沖縄の自然風景を撮影した写真画像 (三好，2002; 新美，2003) 10 枚を編集し用いた。すべての刺激はノートパソコン (Panasonic Let's note: 画面サイズ 215×285) に提示した。刺激の提示は ERMS-OKIU.ver.3.3 (又吉，2012) によって制御し，提示時間，提示時間間隔は 2 秒間とした。

課題　川平 (1988) と同様の方法を用いた性格特性認知課題を実施した。性格特性認知課題は，画面上に提示される性格特性語が，自分自身の性格にあてはまるか否か (以下，自己判断課題とする)，沖縄県民と他県民のどちらにより特徴的であるか (以下，モーダル・パーソナリティ判断課題とする) の判断を求める 2 つのパートから構成された。

手続き　実験参加者が本実験の目的にとらわれることのないよう，現代大学生の性格に関する意識調査を行っていると実験の目的を偽装した。実験参加への同意が得られた後，性格テストへの回答を求めた。この性格テストの得点は，自己認知操作時に実験参加者と伝統的日本人との性格の類似度を示す指標であると偽って利用した。自己判断課題では，画面に提示される性格特性語が自分にあてはまるかあてはまらないか判断して該当するキーを押すよう教示した。自己判断課題完了後，実験参加者を自己認知操作条件または視覚情報刺激条件に無作為に割り当て，沖縄県民意識の操作を行った。沖縄県民意識喚起あり条件では，実験冒頭で回答した性格テストが伝統的日本人らしさを測るものであったと偽った上で，実験参加者の性格テストの得点が“現代大学生の平均得点 25 点よりも大きく下回る 10 点であり，日本人らしい性格をほとんど有していない”と偽った情報を与

えた。これとは逆に，沖縄県民意識喚起なしでは，実験参加者の性格テストの得点が“現代大学生の平均得点 25 点を大きく上回る 36 点であり，日本人的な性格を強く有している”と伝えた。一方，視覚情報刺激条件では，画面に提示される風景写真を見るように教示した。以上の沖縄県民意識の操作を行った後に，モーダル・パーソナリティ判断課題を課した。モーダル・パーソナリティ判断課題では，画面に提示される性格特性語が沖縄県民と他県民のどちらに特徴的な性格であるかを判断し，該当するキーを押すよう教示した。

結果と考察

自己判断課題　自己記述的と判断された沖縄県民的性格特性語と他県民的性格特性語の平均語数および *SD* を Table 4 に示す。また，出身県のモーダル・パーソナリティと実験参加者の性格特性との一致の度合いを検討するため，川平 (1988) と同様の方法で自己所属集団特性適合度を求めた。自己所属集団特性適合度とは，所属集団の特性を自己の性格にあてはまると判断し，逆に他集団の特性は自己にあてはまらない判断する傾向を指す。たとえば，沖縄県出身者の場合，沖縄県民的性格特性語に対し自己記述的であると答えた際に 1 点，他県民的性格特性語に対し非自己記述的であると答えた際に 1 点の得点を与え，逆に他県出身者の場合は，他県民的性格特性語に自己記述的であると答えた際に 1 点，沖縄県民的性格特性語に非自己記述的であると答えた際に 1 点を与え得点化した (Table 5)。

Table 4

自己判断課題において自己記述的と判断された沖縄県民的性格特性語および他県民的性格特性語の平均語数 (*SD*)

	特性語の種類	平均語数
沖縄県出身者	沖縄県民的性格特性語	12.82 (3.17)
	他県民的性格特性語	10.71 (3.41)
他県出身者	沖縄県民的性格特性語	10.88 (5.36)
	他県民的性格特性語	11.38 (4.10)

Table 5

出身県ごとの自己所属集団特性適合度 (*SD*)

	自己所属集団特性適合度
沖縄県出身者	18.85 (5.19)
他県出身者	17.63 (7.56)

注) 表内の数値は平均。

沖縄県民的性格特性語と他県民的性格特性語に対し，自己記述的であると判断した特性語数に出身県による有意な差は認められなかった (沖縄県民的性格特性語: $t(34) = 1.30$, *ns*; 他県民的性格特性語: $t(34) = -0.46$, *ns*)。このことは，沖縄県民と他県民の性格が類似したものであることを示している。また，自己所属集団特性適合度に出身県による有意な差は認められず ($t(33) = 0.53$, *ns*),

沖縄県出身者の方が他県出身者よりも自己所属集団特性適合度が高いとする川平 (1988) と同様の結果は認められなかった。よって，現在の沖縄県出身者においては，自己スキーマとモーダル・パーソナリティの関連性が希薄化している可能性が示唆された。

モーダル・パーソナリティ判断課題　出身県と条件別のモーダル・パーソナリティ判断課題の平均正答数および *SD* を Table 6 に示す。沖縄県民的性格特性語と他県民的性格特性語の平均正答数について，出身県 2 (沖縄県・他県) × 自己認知操作 2 (沖縄県民意識喚起あり・沖縄県民意識喚起なし) の 2 要因分散分析を行った結果，すべての主効果，交互作用ともに有意ではなかった ($Fs<1$)。一方，視覚情報刺激条件では，沖縄県民的性格特性語の平均正答数に出身県による有意な差が認められた (沖縄県民的性格特性語: $t(10) = 2.98$, $p<.05$; 他県民的性格特性語: $t(10) = -1.29$, *ns*)。このことから，現在の沖縄県民は沖縄スキーマをもっているが，それは自己スキーマの中には存在せず，自己スキーマとは関連が弱いものとして存在していることが示唆された。

Table 6

モーダル・パーソナリティ判断課題における出身県および条件別の平均正答数 (*SD*)

	特性語の種類	自己認知操作条件		視覚情報刺激条件
		沖縄県民意識喚起あり	沖縄県民意識喚起なし	
沖縄県出身者	沖縄県民的性格特性語	17.00 (1.56)	16.75 (1.89)	16.67 (1.87)
	他県民的性格特性語	15.30 (2.16)	13.00 (5.35)	13.44 (2.79)
他県出身者	沖縄県民的性格特性語	16.00 (1.41)	16.00 (1.41)	12.67 (2.52)
	他県民的性格特性語	14.50 (3.54)	16.50 (0.71)	15.67 (1.53)

総合考察

本研究の目的は，自身と他県民の特性の差異を意識する程度が弱くなったと推測される現在の沖縄県民において，川平 (1988) と同様に，沖縄県民の自己スキーマの中に沖縄スキーマが含まれているのかどうかを検討することであった。実験の結果，川平 (1988) と同様の結果は認められず，沖縄の自然風景写真を提示した後にモーダル・パーソナリティ判断課題を課した場合にのみ，沖縄県出身者は他県民に比べ沖縄県民のモーダル・パーソナリティを正確に判断できることが明らかとなった。このことから，現在の沖縄県民では，自己スキーマの中に沖縄スキーマが存在せず，自己スキーマとは関連の薄いものとして沖縄スキーマが存在しているといえる。したがって，現在の沖縄県民は，自己を沖縄県民の中の一人として捉えることが非日常化しており，自己スキーマの中で沖縄県民であるという事実がそれほど重要な位置を占めなくなりつつあると推測される。

本研究から現在の沖縄県民の自己スキーマとモーダル・パーソナリティの関連性が希薄化していることが示唆されたが，今回対象とした沖縄県内大学生のみを沖縄県民と他県民の代表とみなすのは妥当ではないため，本研究の結果が限定された範囲内におけるものであることを考慮する必要が

ある。同様に，沖縄県民の自己スキーマにおける沖縄スキーマの重要性の弱化が，本研究で対象とした若年世代に限られたものであることに注意しなければならない。沖縄県民の県民意識の強さは，世代によって異なることが示唆されており（東江，2006），県民意識が強いとされる中高年の沖縄県出身者を対象とした場合には，自己スキーマとモーダル・パーソナリティの関連が強いとする川平（1988）と同様の結果が認められる可能性がある。

近年では地域の独自性が見直されるようになり，独特の文化を有する沖縄県以外を本土という一つの集合体として捉える必要はなくなりつつある。かつて，心理的距離を内包していた本土という言葉は，若者に限っていえば海を隔てている本土というように，物理的距離を言い表す言葉として使用されることが多くなってきた。現在の沖縄県民にとって本土という言葉は，沖縄県民自らが，沖縄県と他県の文化的違和感を強調し，自身の主体性を押し出す意思の表れとして捉えられつつある。そうした意味で，沖縄県民の中にある沖縄県対他県という認知は，沖縄県の文化の個性を維持・発展させることを意図して，文化のレベルで今後も生き続けていく可能性がある。

引用文献

東江平之（1991）．沖縄人の意識構造 沖縄タイムス社

東江平之（2006）．沖縄のアイデンティティについて考える 沖縄教育臨床研究，**8**，1-14.

Du Bois, C. (1944). *The people of Alor: A social-psychological study of an East Indian Island.* Minneapolis: The University of Minnesota Press.

川平尚子（1988）．沖縄人の自己関連情報の認知に関する研究 琉球大学法文学部卒業論文（未公刊）.

Kuhn, M. H., & Mcpartland, T. S. (1954). An empirical investigation of self-attitudes. *American Sociological Review*, **19**, 38-76.

Markus, H. (1977). Self-schemata and processing information about the self. *Journal of Personality and Social Psychology*, **35**, 63-78.

Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, **98**, 224-253.

又吉光邦（2012）．心理反応速度計測ソフトウェアの制作 産業情報論集，**9**，13-20.

三好和義（2002）．ニライカナイ――神の住む楽園・沖縄―― 小学館

新見　直（2003）．南風浪漫――ミントブルーの海に浮かぶ島―― ワニブックス

NHK 放送文化研究所（1997）．現代の県民気質――全国県民意識調査―― NHK 出版

大城紀文（1972）．沖縄の人格特性に関する社会心理学的研究　琉球大学教育学部心理学科卒業論文（未公刊）.

Rogers, T. B., Kuiper, N. A., & Kirker, W. S. (1977). Self-reference and the encoding of personal information. *Journal of Personality and Social Psychology*, **35**, 677-688.